

第6回の関係者からのヒアリング③における主な発言内容

鳥取県福祉保健部子育て王国推進局子育て応援課 足立課長補佐

2. 量的拡充

- ・ 教育委員会との調整が難しく、放課後児童クラブの増設や分割の際には学校の理解を得られないような現状がある。
- ・ 高学年になると放課後の過ごし方が多様化するため、入所児童は低学年が多い。
- ・ 発達障害の子どもや、発達障害の診断のついていないけれど、特別な支援が必要な子どもが増えている状況。

3 類型

- ・ 放課後子ども教室のみを実施している地域は、元々核家族が少なく、まったく保育ができないわけではない家庭が多い地域であったり、子どもをまとめて放課後子ども教室で預かり、17 時頃にバスに乗せて家まで送るような山間部特有の取り組みを行っているような地域である。

4. 質の確保

- ・ 女性は育児や介護でライフスタイルを自分以外の場面で左右されやすいため、放課後児童支援員の認定資格研修の受講要件となっている2年2,000 時間の従事時間を満たすことが難しい。そういったこともあり、人材確保が困難となっている現状がある。
- ・ 鳥取県の取り組みとして、放課後児童クラブと放課後子ども教室合同で全職員を対象とした研修（夏休み前の安全管理、発達障害の方への対応、児童の遊び方等について）を実施し、質の向上を図っている。
- ・ 座学の研修を受講するより、現場に出て実践でトレーニングすることの方が放課後児童支援員の養成としては意義があるので、放課後児童クラブに勤めながらスキルアップすることが望ましいと考える。
- ・ 放課後児童支援員に対する支援として、特別な支援が必要な児童の相談などのできる巡回指導の仕組みが構築されると、円滑な放課後児童クラブの運営ができるのではないかと考える。

5. その他

- ・ 長期休暇中は放課後児童支援員の増員が必要となるが、長期休暇の期間の勤務に対応できるような人材を確保することは、特に困難。
- ・ 人材確保については時間給では困難なため、制度の前提を日給での職員雇用とする必要があるのではないかと考える。

2. 量的拡充

- ・ 余裕教室がない、学校敷地内に放課後児童クラブを整備する場所がない、学校外の用地確保も困難であり、学校周辺のコミュニティーセンターなどの公共施設も、放課後児童クラブの開所時間の特性上、利用時間を占有することから利用が困難な状況があり、新規で放課後児童クラブを整備することが難しい。
- ・ 余裕教室の利用に関しては、教育委員会との調整が難しい。
- ・ 高松市では運営委員会に小学校関係者が委員や顧問として関わることで、児童に関する情報交換や学校の施設利用などについて連携を図っている。

4. 質の確保

- ・ 高松市では小学校や中学校の校長経験者を特別支援員という形で雇用しており、放課後児童支援員のアドバイザー的な役割を担っている。具体的な業務としては、放課後児童クラブを巡回し、実態に即した円滑な教室運営方法や、特別な支援が必要な児童への関わり方などについての指導・助言等を行っている。
- ・ 放課後児童支援員及び補助員の能力の向上を図るため、巡回支援訪問で把握した問題点とその対応などを盛り込んだ研修を実施している。
- ・ 高松市では、特別な支援を必要とする子どもが所属する放課後児童クラブに対し、大学教員や小学校教員 OB などの専門家による巡回支援訪問や職員研修を行ったり、関係機関との連携を図り、支援が必要な子どもに対し、柔軟できめ細やかな対応ができるような、一貫した支援体制を構築する発達障害児等支援体制構築事業という事業を実施し、放課後児童支援員及び補助員の能力の向上を図っている。

5. その他

- ・ 認定資格についての経過措置が終了したあとについても、研修未修了の者であっても採用後一定期間内に研修の修了を予定している者であれば放課後児童支援員として従事できるようにしなければ、放課後児童クラブの運営に支障をきたすのではないかと考える。

2. 量的拡充

- ・ 一体型にすることで全学年の児童がともに過ごすことができ、異学年同士の交流にもつながる。
- ・ 放課後事業は同学年、異学年、大人達と様々な人と触れ合うことができる場であり、子ども達がコミュニケーションを学ぶ場となっている。
- ・ 放課後に特別活動を行うことは、学校の学習活動だけでは引き出せない子ども達の様々な面を引き出すことにつながっている。
- ・ 一体型として学校内で実施することで、児童の安全・安心を確保できる。
- ・ 複数の大人の目線で、子ども達を理解していく必要があると考え、学校と放課後事業合同で定期的にケース会議を行っている。
- ・ 一体型は小学校単位での実施のため、児童の安全は確保しやすいという利点はあるが、学校単位の活動に陥りやすく、他校との交流が希薄になってしまうという課題がある。
- ・ 低学年と高学年では利用の満足度に大きな開きが生じており、高学年を対象としたアンケートでは、「飽きてしまった」、「学校の外で遊ぶ方が楽しい」、「おもしろい活動がない」といった回答が多く見られ、高学年の利用が伸び悩んでいる現状がある。
- ・ 放課後子ども総合プランを実施する中で、事業そのものの成果指標についてどの指標が望ましいか明確なものが持てないという課題がある。

4. 質の確保

- ・ 北区の取り組みとしては、全ての放課後子ども総合プランに児童館・子どもセンターが関わり、様々なプログラムを実施している。
- ・ 放課後子ども教室のスタッフは、区が実施する研修に参加し、区全体で質の向上を図っている。
- ・ 実行委員会や放課後子ども教室での体験活動の講師など、多くの地域の方々に関わってもらっている。